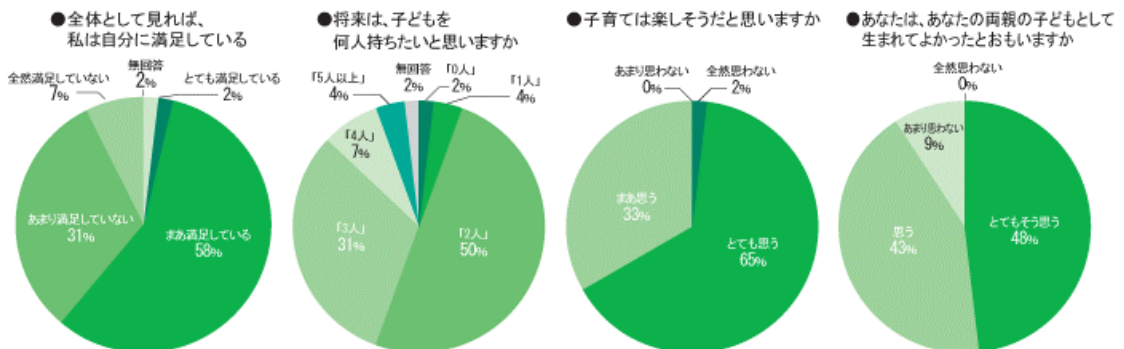


10代の子どもたち(中高生)の子育て支援ボランティア養成事業に参加して

1

今回の講座&実践に参加しようと思ったきっかけは？

- ただ子どもが好きじゃつとまらないことだとわかっているが、どういう面で大変だとか、望ましい子どもの接し方を知りたいと思いました。
- 最近、ちっちゃい子がかわいいと思えるようになったから。こんなのもいいと思った。
- 将来、保育士や幼稚園教諭など、子どもに関わる職業につきたいと思っていて、自分の役に立つと思って参加しました。そして、いつか母親になるつもりなので、その勉強にもなり、知識豊富な人間になりたいからです。
- 助産師と保育士のどちらになりたいか分からなくなったから。
- 「子育て」というのに興味があるけど、興味があるだけでは「子育て」はできないので、今のうちから学んでおこうと思ったので。
- いろんなことに目を向けることで、自分の世界感、子育て感を広げたくて。
- 新しいことに挑戦したかったから。
- 将来、子どもに関わる仕事をしたいので、いい経験になるかと思って。



2

講座に参加して

- 小さい頃のことを思い出した。
- 赤ちゃんの接し方がわかって嬉しい、これなら子どもと楽しく接することができると思った。
- お金を使わなくても身近なものでおもちゃが作れておもしろい。
- 0歳から1歳の子の成長する早さやすごさに驚いた。
- 性についての話が一番感銘を受けました。性についての見方がすごく変わりました。
- 自分の長所は、たくさんあるということがわかった。
- 子育てをする母親が非常に大変で困っていることを知った。
- 保育と一口に言っても幅広い考え方や分野があることを知りました。
- 子どもと関わる時にあった不安が消え去ったような気がしたので、子どもと接するのがさらに楽しみになりました。
- 同年代の中高生が、このような講座を受ける事は必要だと思う。
- 今まで学校で学ぶことができなかった性教育や子どもの成長などを知ることができてとても楽しかった。

3

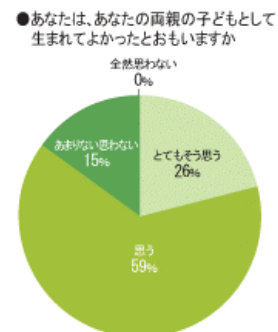
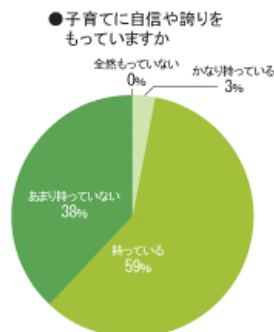
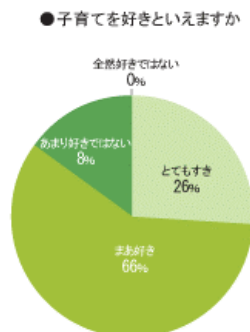
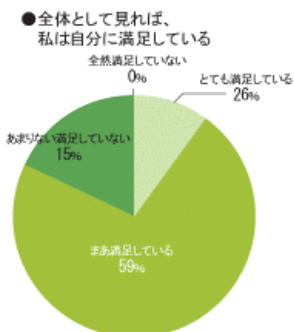
保育実践を体験して

- 普通に遊んでいても急に泣き出す子、泣いていたのに遊びだす子など色々見られすごく楽しかった。
- すごく大変、すごく楽しい。
- 赤ちゃんはすごく小さくて可愛い。抱っこできて嬉しい。
- 寝ているときの顔は最高にかわいい。
- オムツ替え、ミルクなど実際に勉強した事を体験できて良かった。
- よく泣くのに驚いた、お母さんは偉大だ!またやりたい!
- 早く自分の赤ちゃんが欲しい!
- お母さんから離れる前から泣いていたので、どうしようかと思ったけど、抱っこして外を見ていたら寝てくれたので、ほっとした。目が覚めた時、私の顔をみて手を出してくれたので感動した。
- 明るいところでは元気に遊んでるのに、暗いところに行くとダメなので驚いた。
- 赤ちゃんを抱っこするのが、こんなに大変だとは思ってもしなかった。手がつりそうだった。
- 赤ちゃんはしゃべれないから、何を考えてるのかわからなくて困った。でも、こっちがわかろうとしてあげないとダメなんだなと思った。
- 折り紙を作って、と言われたのにあまり作れなかった。もっと練習しよう。

おとなのサポーター養成講座に参加して

おとなのサポーターの声

- 自分を認めることが、とても大切なことだと感じた。
- 子どもの心を受けとめることへの姿勢のすごさを感じた。自分が実際にボランティアの子どもたちと向きあうとき、受けとめるという気持ちで接していなかったことに気づいた。と同時に実践するむずかしさを感じた。
- ふだん意識せずにやっていることが、相手とコミュニケーションをとるためのいろいろな要素を含んでいるとわかった。
- 体で感じるというのは、頭でわかったつもりになっているより、ずっと効果があると思った。



10代の子どもたちの子育て支援ボランティア養成事業の位置づけ

全国5箇所で開催してきたこの事業を通していえることは、子どもたち自身が託児体験を生き生きと、積極的に参加しているということです。小さな子どもたちと接する体験を重ねることで、単にお世話をしあげるといった関係から、小さな子どもたちからもたくさんのもをもらっているということに気づいていきます。そして、子どもたちのまわりでサポートするおとな、託児体験に協力してくれる親御さんたちがいてこそ成立するということも、学んでいきます。人は地域の大勢の人の中で育ち合っているということを知る第一歩だとも考えられます。ボランティアとは本来一方向のものではなく、双方向の関係性があって成立するということを考えると、この事業を実施していく時、子どもたちがボランティア体験を通して社会参画しているという位置づけはとても重要だといえます。

人にやさしい多様な子育て支援システムが機能している子育て先進国カナダでは、ベビーシッター養成を「子どもの自立と社会参画」と捉え、家族を始め地域の多くの人たちが子どもたちの自立への応援をしています。私たちも、そういった方向で参画の場を広げていければと願っています。

以下養成事業を終えて見えてきた点を、いくつか整理して述べたいと思います。

1

子どもたちの体験の場として

子どもたちは、体験の場から様々な学びをし、成長しています。そして、次への継続的な体験を希望していきます。その場を確保し、また広げていくことが子どもたちのニーズを受けとめることとなります。その場合、ニーズに答えるための場がどのようなものであると効果的か、成果があがるのかは重要です。できれば、子どもたちの身近な場所で安心して参加できる場が望ましいので、そのために、地域へ理解と協力をお願いしていく必要があるでしょう。

現在全国的に子どものボランティア活動を応援しようという動きは広まってきています。この動きが、体験の場への義務化であったり、良いことをやらせようというおとなの勝手な意向で広がっていくことを、いましめたいと思います。あくまでも、子どもたちが自主的に「やりたい、やってみたい」という気持ちを大切にしたい取り組みであるからこそ、楽しさが意欲につながり、体験を重ねることで自信と責任感が育ってくると考えます。おとなの都合に合わせるのではなく、子ども自身が社会にとって自分たちが必要な存在なんだと実感できる場を作ることが大事です。

今後、行政や、企業などを巻き込んだ体験の場が広がっていく可能性を考えると、子どもの育ちを長期的なスパンで捉え「人間が育つ」という環境づくりの視点は、欠かせません。

2

体験の場を効果的に行うために何が必要か

A 学びの場

大切な命を預かっているということ、まず第一に考える必要があります。そのために学びの場はとても重要です。「一度講座を受ければそれでいい」という事ではないので、できれば年に一度は学びの場を持つことは大切です。次の講座を開催する時は、修了した人も含め、くりかえし学びの場に参加するシステムが必要だと思います。これは、10代の子どもたちだけでなくおとなのサポーターも含めてです。

カナダでは、子どもたちが参加しやすい身近な地域で9回前後のカリキュラムを学習するシステムがあり、毎日学校が終了した後に学習できる環境が整備されているようです。日本でも、公民館や、学校の空き教室などを活用してこのようなプログラムを実施できるシステムがあれば、子どもたちも子育てをもっと身近に感じるのではないのでしょうか。



B おとなのサポーターの役割

この事業は子どもたちだけで実現するわけではありません。子どもたちを見守るおとなのサポーターの存在はなくてはならないものです。だからこそ、ここに関わるおとなの資質は問われなければなりません。危ないから、といって手出し、口出しばかりしている現状が気になります。子どもたちが参画意欲を高め、責任感を持つという体験につなげるためにも「見守る・待つ」ということを、いつも心がけるおとなの存在が必要です。このような子どもの参画を見守り、対等感を持って向きあえるおとなのサポーターをどう育て、増やしていくかが大きな課題です。

そのためにはサポーターとして、単に子育て支援に関心があるおとな、というだけでは限界があります。子どもの置かれている今の社会状況を学び、子どもの存在をきちんと受けとめ、子どもを一人の人間として理解するための専門家を加えた学習の場が重要です。

C 子育てのネットワークづくり

10代の子育て支援ボランティア養成事業は、多方面の協力があって初めて実現するものです。体験の場を広げていく上でも地域の子育てに関わる様々なグループや団体などにつながっていく必要があります。それは、この活動はあくまでも、預けたい、預けてみようと思ってくれる子育て中の親のニーズが基盤にあるからです。この現場のニーズに対してどう働きかけるか、理解と協力をどう得るかということは活動を展開していく上で不可欠です。そのためにも、日頃から地域の子育て支援に関わっている人たちと情報交換し、どの部分で協力しあえるかなども含めた交流や学習の場を持つことは大切です。地域ぐるみ、多世代で子育て支援を考えていく、いわゆる「子育ての社会化」を実感するのに、10代の子どもたちの子育て支援の活動は大事なキーパーソンとなり得ると思います。

3

リスクへの対応

実際に人の「いのち」を預かるからには、当然危険に対しての対処も慎重に行わなければなりません。

特に、対象が乳児から幼児ということで、そのリスクは当然大きなものです。そこで、その対応として考

1. 託児時間: 預けられる子どものことも考慮して、原則2時間を基準に考える
(受付などの時間を入れても3時間以内)
2. 1対1以上の託児人数を基準に、受け入れ準備をする。
3. 受け付け時の問診票での確認。
4. 緊急時の連絡先(休日診療先、保護者への携帯連絡先及びその親族の連絡先など)の準備。
5. 預けられる子どもの状態(身体的・精神的)によっては、託児を断ることも検討する。
6. 遊具の選び方を工夫(シンプルで安全性の高いもの。素材、感触などに注意)
7. 保険を掛けておく。

4

これからの展望

10代の子どもたちの子育て支援ボランティア養成事業は、各地でその地域の状況に合わせた様々な形で展開され始めています。今回基本的なプログラムと「いのち」を考える講座を組み込みながら進めてきたこの事業が、子どもたちにとってより良い形で広がっていくことを願っています。これからも、おとなと子どもと一緒に歩むことから信頼関係が生れること、子どもたち誰もが持っている可能性を信じていくこと、このことを、広く地域の人々に呼びかけながら、子どもたちの社会参画や自立へつなげる場が広がっていくことを目指して活動していきます。

10代の子どもたちの子育て支援ボランティアが、これからどんどん広がっていくことを願いながら、そしてこの子どもたちがおとなを、社会を変えていってくれるかもしれないという期待感をもって、これからも子どもたちの活動を応援していきたいと思っています。この報告書がそのための一助になれば幸いです。(小笠原 由季)

「いのち」のテーマは10代の子どもたちの本当に知りたい事、見つめたい事にぴったりはまったことを実感しました。会場は地元女子大学キャンパスとし、講師として石狩市保健士、保育園長に協力をいただき地域のネットワークづくりにもなった講座でした。(藤原 市子)

乳幼児の「笑顔」「泣き顔」とたくさんの10代の子どもたちが出会ってほしい…今、とても大切なことだと思います。企画運営委員会に参加できとても良い経験ができました。(伊藤 美由紀)

ある高校生の会話—「最初の子どもは男女、どちらがいい?」「やっぱ、男の子」「女の子の方がカワイイ洋服を着せられるよ」…そこで、「子どもって、欲しい?」と問うと、全員が躊躇なく「欲しい」。「育てることに不安はないの?」と問えば「……」。たしかに、子どもなんていらぬと言うよりは、欲しいと言われるほうがいいけれど、まるでオモチャやゲームを買うかのような安易な感覚に不安を覚えた。「いのちの大切さ」…ちょっとは彼らの心に響いてくれたかな。(飾森 千代子)

他人への関心、愛着、信頼感が薄れがちの今こそ、この事業が必要だったと声を大にします。ステキな子どもたち、そしておとなたちとの出会いに感謝しつつ、この輪の広がりを願います。(土屋 美恵子)

保育士志望とか、子どもが好きというだけでなく、また、「子育て」というと女の子がすることとしないで、広く各地で男の子にもどんどん参加してほしいなと思いました。「命」の力、すばらしさ=かけがえのない自分、生きている手応えを掴んでほしい。(田中 美智江)

1月~3月はじめまで、短い期間にギュッと中身の詰まった充実した活動だった。特に子どもたちの各回毎の「感想」に感動してしまった。とても素直で深いところで受けとめていた。子どもたちは感じる心を持っている。まさに子どもたちと一緒に作り出した事業だった。子どもたちがまっすぐ伸びていく活動の場をこれからも広げていきたい。(三好 美喜子)

「きょうは僕の持ってるトレーナーの中で一番肌ざわりのよいものを着てきました。」これは高2男子のことは。この事業で得られたことは大。命のふしぎへの発見や感動、母親やおとなへの共感はもちろんだが、なんといっても一番の成果は、赤ちゃんのもってる魅力(赤ちゃん力)の発見ではないかとひそかに思っています。子どもたちの可能性に目をみはると同時に、すべての子にこの体験を、と心から願う。(福田 房)

KIDSAGE2!
もっと、こどもたち

本事業を企画して、いろいろな角度から「いのち」を感じられ、10代の子どもたち、赤ちゃん、そしておとなたちにとって、とても豊かな時間が持てたと実感しています。今後、このような事業が普通になる地域社会が広がっていくことを願っています。ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。(三島 由香)

子どもが“子ども”として生きられる社会を

「子どもNPO・子ども劇場全国センター」は
子どもとおとなのパートナーシップで
子どもたちが、夢と希望を持てる社会を目指します。

子ども劇場は地域における芸術体験や、野外での遊び体験を通じ、子どもとおとながともに育ちあい、子どもが社会参画する機会を広めていく、40年の歴史のある、日本で最大の“子どもNPO”です。ワクワクどきどきする感動や、さまざまな人々との出会いから、子どもおとなも豊かに育つ、そんな「安心して自分を出せる居場所」を地域に広めると同時に、「子どもの権利条約」や「文化芸術振興基本法」「NPO法」など、子どもと文化および市民社会を築くための基盤整備にも大きく貢献しています。

10代の子どもたち(中高生)の子育て支援ボランティア養成と おとなのサポーター養成事業報告書

主催 特定非営利活動法人 子どもNPO・子ども劇場全国センター
独立行政法人 福祉医療機構「子育て支援基金」助成事業

発行

特定非営利活動法人
子どもNPO・子ども劇場全国センター

〒106-0032

東京都港区六本木4-7-14みなとNPOハウス3F

TEL 03-5775-3407 FAX 03-5775-3409

<http://www.kodomo-npo.org> [mail:center@kodomo-npo.org](mailto:center@kodomo-npo.org)

印刷・デザイン 株式会社プランニング・ヴィ